

# 伊藤外科ニュース



## 96号

2012.06 発行

### ベトナム旅行記

午前中は快晴、午後から突然の激しい雨と雷と変動の激しい天候ですが、皆様お元気でしょうか？私はゴールデンウィークを利用して、ベトナムの首都ハノイに行きまして参りました。

ハノイの一般的な印象は、やはりベトナム戦争による悲惨なイメージでしたので、旅を決めるまでに躊躇しました。しかし、幸いにハノイに行かれた方々から、綺麗で優しい街であると聞いたので5月2日に出発しました。

ハノイの中心部は、フランスの香りと東南アジアの雑踏さが混在した不思議な雰囲気でした。車道は広く日本製のバイクで溢れ、慣れない日本人の我々は横断が困難でした。ハノイは、雑然としていますが東京と異なり街にゴミやゴミ袋が全くない事が不思議でした。ガイドさんによると、朝と夜に市の職員が車でゴミを回収する時間はあり、その時間に合わせて市民がゴミを出すとのことでした。

ベトナムは経済的にはまだまだの印象でしたが、学校の建設が間に合わない程子供たちの人口増加が多く、戦争からの復興を考えても今後急成長する国家との印象を持ちました。



ところで、私は泊まったホテルには20代の日本人女性スタッフが働いていました。彼女はとても健康的で親切で、現地のスタッフとの意思疎通が上手くいかない時には彼女を頼りました。

困ったときに頼れる医療が大切だなと帰りの飛行機の中で思った次第です。

### 区民検診

さて、6月から健康診査いわゆる区民検診が一斉に始まります。40歳以上の方々は、伊藤外科をはじめ各医療機関で受診することができます。

例年の事ですが、働き盛りの方々の受診率の低さが行政では問題になっています。健診を受けない理由は、体調も良く忙しい、健診で異常を指摘されることが不安、健診の書類が煩雑で解りづらく面倒など様々です。

私は、外来を受診なさった患者さんに健康診査とガン検診の必要性を折に触れて話しています。

健康診査で発見される高血圧、高コレステロール血症、糖尿病などのいわゆる生活習慣病は、動脈硬化を起こす要因であり、予防や治療が遅れるとその合併症のために日常生活に大きく支障が生じます。ご自身の危険度を理解し仕事をなさることをお勧めします。

また、50歳以降の方はいわゆるがん年齢に入りますので、特に喫煙者の方は各臓器のがん検診を同時に受けられることをお勧めします。健診の受け方が分からない方はスタッフに遠慮なく聞いてください。

いよいよ、梅雨入りとなりそうですね。皆様御自愛してお過ごしください。



伊藤外科 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)



## 三弓先生の本棚 23

今回の一冊

### アーネスト・サトウ神道論

アーネスト・サトウ著／庄田元男・編訳

「アーネスト・サトウ」をご存知だろうか。幕末史に興味のある方なら、きっと聞き覚えがあるに違いない。この名前を最初に目にしたときは「シーボルトの娘のイネさん以外にも、あの時代に西洋人とのハーフさんがいたんだなあ」と思いました。なにしろ「サトウさん」ですから。

アーネスト・サトウは生粋のイギリス人である。文久2（1862）年に英国駐日公使館の通訳生として来日。その後、駐日英国公使となり、明治33（1900）年までの通算25年間を日本で暮らした。つまり、幕末から明治という、日本が大きく移り変わる時期をこの地で過ごしたわけである。

日本語はよく、習得するのがもっとも難しい言語に挙げられる。日常会話だけならまだしも、サトウが行っていたのは公的な交渉の通訳である。江戸時代にイギリス人が日本語を取得するのがどれだけ困難なことか、想像すらつかない。ところがサトウは会話だけでなく、文字も読めた（日本人の私にだって、江戸時代の古文書はまったく歯が立たないのに！）。そして驚きを通り越すのが、本書のタイトルからもわかるように、彼は「神道」の研究まで行っていたのだ。

明治5（1872）年、初めて西洋人一行が伊勢神宮に立ち入った（記録によると「参議・大隈重信たちの計らいによって」）。そのなかにアーネスト・サトウもいた。彼はこのときのことを「伊勢神宮」と題した論文にまとめているが、これをきっかけに『古事記』や『日本書紀』、古い祝詞をはじめ、江戸時代の国学者たちの文献等々を読み込んでいくつかの論文を書いている。

嗚呼、こう書いているだけで頭がクラクラしてきた。しつこいようだが、明治維新をまたいだ時期に、イギリス人が「原語（日本語）」で「神道」の研究ですよ!! サトウは日本及び日本人を知るために、その根幹であるだろう日本の民族信仰を知ろうとしたのだろうが、当の日本人ですら明確に論ずることなどできないものを……。

論文「伊勢神宮」は本書にも収められている。これは、明治初頭に青い目の外人さんが見た日本としてもおもしろい。おもわず笑っちゃったのが、神話を解説するくだり。天孫降臨で知られるニギハヤヒ命（アマテラスの孫）を「養子による孫息子」と表現している。ここで「養子」と書かれているニギハヤヒ命の父は、誓約（うけい。神に誓うことによって成否等を占うこと）によってアマテラスの勾玉から成された男神だ。産業革命を成し遂げていたイギリス人としては、こういう非現実的な箇所をどう含点したらいいのか苦心した結果が「養子」だったのだろうなあ。

ともあれ、江戸時代の国学者のあとを「真の科学的国学者」として継ぎ、神道を深く深く探求しようとしたアーネスト・サトウ、このイギリス人の「なにかを知ろう」とする切ないまでの情熱に圧倒される一冊です。

あっ、今回も「三弓」じゃなくて「一弓」の本棚からでした。ゴメンナサイ。 （一弓）